

琉球大学学術リポジトリ

江戸幕末期における地理教育の役割 — ジョン万次郎の世界地図を例として —

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-18 キーワード (Ja): 必修科目の不履修問題, 地理教育, 世界地図, 世界認識の形成 キーワード (En): 作成者: 西岡, 尚也, Nishioka, Naoya メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/991

江戸幕末期における地理教育の役割

—ジョン万次郎の世界地図を例として—

西岡尚也 (琉球大学教育学部)

The role of geographic education in the last years of Edo era

—From the case study of The Jhon Manjiro's World Map—

Naoya NISHIOKA

キーワード：必修科目の履修問題、地理教育、世界地図、世界認識の形成

1. はじめに

2006年10月末、富山県の県立高校で発覚した「必修科目履修問題」は、その後約500校(約10万人)を越えた全国の公立・私立高校を巻き込み、大きな教育問題へと拡大した(資料1)。この時

に驚いたのは「…大学受験に関係ない教科は教えずに済ませていいと考えていた…」という校長や県教委の弁解である。その後は「補習」のあり方についてのみで終始した。しかしながら一方で、「何のためにその教科を学び・内容を教えるのか」という議論は、ほとんどなされなかった。

教師黙認、内申書改ざんも

指導要録の虚偽記載
悪い意識なかった

補習必要 404校

卒業に必要な科目、学校が教えず
高校履修漏れ

必修逃れ
推薦入試 課外補習
3県勢推挙が黙認
単位不足
虚偽筆拍

高校履修漏れ

必修逃れあきれた言い訳

特色ある教育と受験対策

補習必要延べ8万6000人

本社調査 5高校は200回以上

「違反」未履修教科書買わず
経緯は不公平
岩手の高校「預算せぬよう」

高校、後始末に奔走

資料1：高校履修漏れ新聞報道
(2006年10月27日～11月5日)
出典：朝日・毎日・読売・産経・日経・京都
・神戸・沖縄タイムスの各社記事より作成

さらに当初は、学習指導要領の「厳格さ」に沿った補習の実施を主張した文部科学省であったが、結果的には現場の反対に屈し、補習時間は大幅に軽減され、形骸化された。

これは一方で学習指導要領の「権限」を理由に「日の丸・君が代」を、現場に持ち込もうとする、同じ文科省の姿勢と大きく矛盾している。いずれにせよ学習指導要領そのものの「無責任さ」「不平等さ」を暴露しただけでなく、教育行政全体の信用・信頼を大きく失墜させる結果となった。

今回の事象は、特に高校の社会科分野(地理歴史科・公民科)の課題である。私は以前に、学習指導要領の世界史必修(=地理教育軽視)問題を報告した(西岡1999)こともあり、長年地理・歴史教育に携わってきた者として、これら一連の問題を「何のためにその教科を学び・内容を教えるのか」を検討するきっかけにしたいと考えている。

本稿ではこのような流れの中で、江戸幕末期の

地理教育の役割に視点をあて再検討を試みた。いうまでもなくアジアの東に位置する日本で、人々が「世界」とどのように接触し、世界認識(世界観)を形成してきたかは、地理教育の興味深いテーマである。

土佐藩は、江戸幕末期～明治初期に活躍した、多くの優れた人物を排出した先進的な地域として知られている。この背景には当時の教育(とりわけ地理教育)が大きな役割を果たしたというのが私の考えである。ここでは、土佐藩のジョン万次郎(1827～98)の「世界地図」にかかわる地理教育を考察した。小稿が現在にも通じる課題＝「何のためにその教科を学び・内容を教えるのか」という議論のスタートになれば幸いである。

2. ジョン万次郎の海外体験

中浜万次郎(1827～98)・[ジョン万次郎]は、

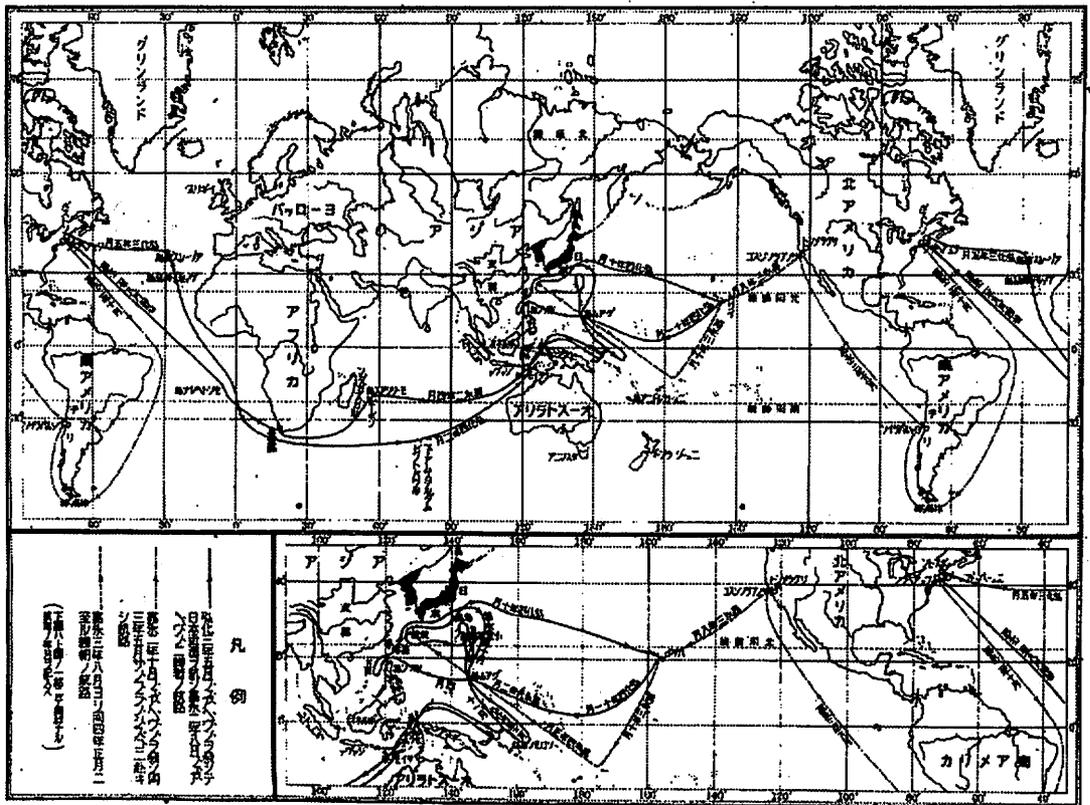


図1：万次郎の航海図

出典：中濱(1936)、口絵「中濱萬次郎航海図(二)」による。

土佐国幡多郡中の浜（現在の高知県土佐清水市）出身の漁師であったが、14歳で漁船が漂流し鳥島（東京都伊豆諸島にある無人島）に4人の仲間とともに漂着した。

約5か月(143日)後、幸運にもアメリカ合衆国の捕鯨船に助けられる。この時の船長（ホイットフィールド）に勧められ、仲間とハワイで別れて万次郎ひとり、船長の郷里アメリカ合衆国東海岸フェアヘブン（コネチカット州）に行くことになる。

アメリカ合衆国の生活では、小学校～専門学校で学校教育を受けた。英語はもちろん、航海術・高等数学などを学び、優秀な成績で修了した。その後、捕鯨船で働きながら一等航海士（副船長）となって、太平洋を中心に世界の海を航海した（中浜1991、pp.38～67）。この間、日本の近海でも操業していて、航海途中に2度の琉球上陸を試みている（図1）。

1回目は1847年3月3日（以下の表記はすべて西暦によった）、沖縄本島（詳細な場所は不明）に立ち寄り、ボートを下ろして上陸したところ、役人の一人から「2日以内に立ち去らないと首をかき切るぞ」といわれたという。2回目は同じく翌4月、琉球諸島の「マンガミレ」（伊平屋島、摩文仁、喜界島の諸説あり）にボートで上陸したという（川澄2001、pp.1083～84）。しかし帰国計画は失敗している。この2度の失敗は十分な準備をしなかったという反省を、教訓として残すことになった。

アメリカ合衆国に帰国後、1849年9月、万次郎は帰国の資金を貯めるためゴールドラッシュのカリフォルニア州、サクラメント近郊の金鉱山へ行き、働いている。その後貯金を貯めてホノルルへ向かった。ハワイでは久しぶりに、いっしょに漂流した土佐の仲間たちに再会し、3度目の帰国チャレンジへの情報を集めた。

3. 琉球王国経由で鎖国の日本へ入国

万次郎が帰国を強く考え始めた理由は、「望郷への思い」が高まっていたということもあったが、お世話になった「捕鯨船」に関わる人々を助けたという希望があった。すなわち捕鯨船が、嵐の

避難や生水・食糧・薪の補給のために、日本の港に入港できるようにしたいという思いである。

彼は、日本の鎖国政策がアメリカの捕鯨関係者間で評判が悪く、常々肩身の狭い思いをしていたという。したがって、日本へ帰ってアメリカ合衆国の真の姿を伝え、アメリカの捕鯨業のために、日本が港を開いてくれるように努力をすることが、自分を助けて育ててくれた、ホイットフィールド船長への恩返しになり、日本のためにもなると考えていた（鶴見2001、pp.57～58）。

江戸幕府が支配する当時の日本は、「鎖国政策1633～1853」を実施し、海外からの入国者は「投獄」されるなど、厳しい取り調べを受けた。長期の「入牢」期間中に健康を害し、命をなくすこともしばしばあった。

幸運に生きて釈放されても「自宅軟禁」を命じられ、自由な生活は送れなかった。また家族にすら海外の事情を話すことは、厳禁とされていた。

このような情報は、ホノルルの万次郎たちにも伝わっていた。直接日本に帰れば、厳しい取り調べを受けることになり、命を亡くすかも知れないのである。

それを避けるためにも、琉球王国（薩摩藩が間接的に支配）にひとまず上陸して、日本国内の情報を集めて薩摩経由で、帰国することを考案したのである。いわば「琉球」が、日本（土佐）帰国への「クッション」の役割を演じると考えたのである。

この背景には、当時捕鯨船の多くが、琉球王国とその周辺で操業していた。琉球王国では、嵐にあって避難してきた捕鯨船への対応が、日本より「緩やか」であると、ハワイに伝わっていたことが考えられる。このような捕鯨船の集まるホノルルには、琉球に関するの情報も豊富であったことが幸いしたといえる。

1850年12月17日ハワイに残ることを希望した2人を残し、上海へ向かうサラボイド号で、ホノルルを出航した。1851年2月3日、沖縄本島沖合に停泊した本船から小型ボートを降ろして、仲間2人と琉球国摩文仁間切小渡浜海岸（現：糸満市摩文仁大渡浜）へ上陸したのであった。

万次郎たち3人と村人との交流は、磯間比呂志（2001）の絵本に詳しい。海外帰国者との接触の危

険を察知した琉球の役人は、直接万次郎たちを那覇へ護送することを避けて、豊見城間切翁長村(現：豊見城市翁長)の高安家=翁長の親雲上(ペーテン)に収容した。そして薩摩役人の「御内用方」として取り調べを受けることになった(沖縄大百科事典刊行事務局編、1983、中p.455)。

ちなみに川澄(2001、p.329、p.375、p.612、p.661)では、中頭郡西原町翁長となっているが、これは同じ「翁長」の地名による混乱であり誤りである。

高安家からの外出は、名目上は「禁止」であったが、薩摩役人の目の届かないときは、地元の若者と交流し、村祭りの「綱引き」にも参加が許されたという(長峰ほか、2004、p.24)。ここにも琉球の人々の外来者への寛容で大きな心がみられる。

1851年2月3日の上陸から約6か月あまりの滞在を経て、7月11日万次郎ら3人が高安家を離れる際には、「…村人の面識人来たりて涙を沾れ共に別れを惜しみける。…」(『漂異紀略・巻之

四』、川澄、2001、p.519)とあるように、高安家の人々や村人との深い交流があったことが伺える(図2)。

4. 万次郎が持ち帰った世界地図7枚

万次郎たちは、さまざまなものを持ち帰ったが、筆者は中でも7枚の世界地図(絵図)に注目したい(川澄、2001、p.321)。3人は琉球(1851年2月3日上陸～)、→薩摩(1851年8月21日～)、→長崎(同年10月23日～)で、取り調べを受けた後、1852年8月25日土佐(高知市)に着いた。

土佐藩でも取り調べを受けた後、ようやく1852年11月16日ふるさと中の浜村に帰り着いた。この世界地図に関しては、それぞれの奉行所での取り調べの記録にも登場する。『琉球在番奉行取調』には「絵図七巻」、『長崎奉行牧志摩守取調記録(下)』には「地図七枚」となっている。



図2：『漂異紀略』(1852)に描かれた「琉球国村落之図」
出典：川澄(2001、pp. 566～567)

しかし『薩摩藩取調記録』では、「但、四枚ハ長崎ニテ取りアゲルナリ… 右ノ内ニテ萬次郎へ御渡シ品…」として「世界の図3枚」になっている(表1)。

表1：万次郎の世界地図に関わる記録

資料	記録	出所
琉球在番奉行取調	一、繪図	七巻 (p.321)
薩摩藩取調記録	一、世界の図 但、四枚ハ長崎ニテ取りアゲルナリ… 右ノ内ニテ萬次郎へ御渡シ品…	七枚 (pp.348~349)
長崎奉行牧志摩守取調記録(下)	一、地図	七枚 (p.406)

備考：出所のページは、川澄(2001)に所収された資料の掲載ページ。

表中の「繪図」「世界の図」「地図」は同一のものと考えられる。

これらを総合して考えれば、世界地図を7枚持ち帰ったが、そのうち4枚を長崎奉行所で「没収」されたことになる。したがって、7枚すべてではなかったが、3枚(少なくとも1枚)は、無事土佐まで持ち帰れたようである¹⁾。

当時の日本人が、どのような世界(世界地図)認識を持っていたかは、新井白石(1657~1725)の世界観でよくわかる(図3)。白石は幕府の役人

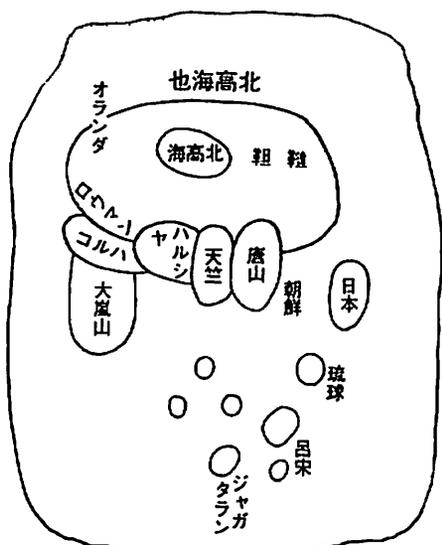


図3：新井白石の世界地図認識
出典：辻田(1971、p.72)

ではあったが、「天文方」ではなかった。したがって白石のような学者・知識人でも「この程度」の世界地図認識であった²⁾。

まして一般大衆は世界地図などみる機会はずっとなかった。せいぜい「唐(カラ)・天竺(インド)とその他」程度の世界認識であったのである。

日本にはこれ以前にも、世界地図や地球儀が、宣教師(鎖国以前)やオランダとの出島における交流でもたらされていた(千田2006、pp.60~93)。けれどもこれらは、幕府の一部の上級役人(天文方など)の限られた人間にしか、見られることはなかった。

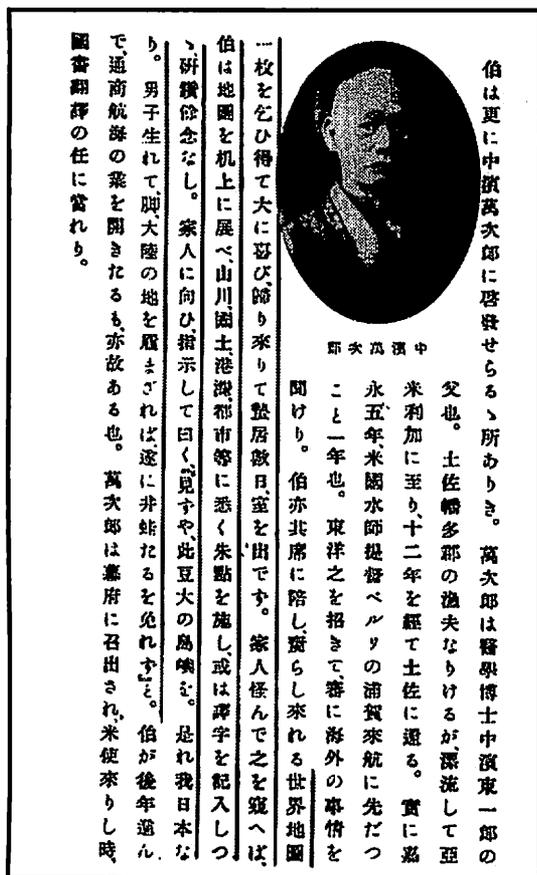
万次郎が土佐に持ち帰った世界地図(3枚?)のうち1枚については、土佐藩仕置役の吉田東洋(1816~62)による万次郎への聞き取り調査があった際、同席していた14歳の後藤象二郎(1838~97)が譲り受けている(中浜1970、p.155)。大町(1914、p.13)は、その時のようすを、「伯(象二郎)は更に中浜万次郎に啓発される所ありき。」として次のように伝えている。

「…世界地図一枚を乞ひ得て大いに喜び、帰り来たりて蟄居数日、室を出でず。家人怪しんで之を窺へば、伯(象二郎)は地図を机上に展べ、山川、国土港湾、都市等に悉く朱点を施し、或いは訳字を記入しつつ研鑽余念なし。家人に向ひ、指示して曰く、『見ずや、此豆大の島嶼を。是れ我が日本なり。男子生まれ、脚、大陸の地を履まざれば、遂に井蛙たるを免れず』と、(一部の旧漢字は新しいものに変更、原本は資料2参照)…」(大町、1914、p.13)。

象二郎は世界地図を眺め続けて、数日間部屋を出なかったという。初めて世界地図を目にした象二郎にとって、その「感動・衝撃」は相当なものであったことが伺える。大きな広い世界の中の「小さな自己の存在」に気づくことは、客観的に自分自身を認識することに結びつく。

このように地図(世界地図による世界認識の拡大=地理教育)は、私たちのたちの視野を広げ、人間を「積極的」「プラス思考」に変える力を持っている(西岡2006、p.98)。

やがて象二郎は、同じく万次郎の世界地図に啓発されることになる。坂本龍馬(1823~67)と協力し、「薩土盟約」「船中八策」「大政奉還」など日



伯は更に中濱萬次郎に啓發せらるゝ所ありき。萬次郎は醫學博士中濱東一郎の父也。土佐幡多郡の漁夫なりけるが、漂流して亞米利加に至り、十二年を経て土佐に還る。實に嘉永五年米蘭水師提督ペルリの浦賀來航に先だつこと一年也。東洋之を招きて、審に海外の事情を聞けり。伯亦其席に陪し、齎らし來れる世界地圖一枚を乞ひ得て大に喜び歸り來りて塾居敷日室を出でず。家人怪んで之を窺へば、伯は地圖を机上に展べ、山川園土港灣都市等に悉く朱點を施し、或は譯字を記入しつゝ、研鑽餘念なし。家人に向ひ指示して曰く、見ずや、此豆大の島嶼を。是れ我日本なり。男子生れて脚大陸の地を履まざれば遂に井蛙たるを免れずと。伯が後年遠んで、通商航海の業を開きたるも、亦故ある也。萬次郎は幕府に召出され、米使來りし時圖書翻譯の任に當れり。

資料2：万次郎から世界地図を見せてもらった藤象二郎のようす（傍線は筆者）
 出典：大町（1914、pp. 13～14）より引用

本の歴史を大きく回転させることになる。

5. 幸運だった川田小龍との出会い

万次郎らが故郷に帰った約8か月後の、翌年1853年7月8日ペリー艦隊が浦賀沖に来航した。7月25日江戸土佐藩邸に万次郎を江戸へ呼び寄せる幕府からの書状が届くことになる。幕府にとっては、万次郎の知識と英語力が必要であった。当時わが国では外国語としてはオランダ語(蘭学)が学ばれていたが、英語ができる人物は少なかった。

これに応じる形で万次郎は、9月3日には江戸に向けて、高知を出発している。

これに先だって、土佐藩でも万次郎らの事情聴取が行われているが、土佐藩の藩命で、万次郎を

取り調べたのは、画家で儒学者の川田小龍(1824～98)であった。小龍は万次郎を自宅(高知城下片町)に3か月間逗留させ、寝起きを共にしながら詳細な聞き取りを行っている(鈴木ほか1996、p. 130)。

また得意な挿絵や地図を用いながら、カラー版で『漂異紀略・全四巻』(1852)を著したのである³⁾。「漂異」の意味は、異(たつみ=南東)の方向に漂流したという意味である。何よりも小龍が画家であったということが幸いし、とりわけ万次郎の持ち帰った世界地図を正確に写し、その漂流体験や捕鯨船での航路・航海体験を詳細に記録し、描いている(図4)。

このことは、この書物(写本など)が流布していく中で、外国事情が一般に拡大しただけではなく、世界地図が多くの大衆の目に触れるきっかけを作ったといえる。

坂本龍馬(1823～67)は、19歳の時に小龍を訪ね、執筆中の『漂異紀略』や世界地図を見せられて、土佐藩や日本国の「小さな存在」を説かれた。このことに啓發されて、海外に目を向ける契機になったという。前述の後藤象二郎と同じ体験をしたのである。龍馬は小龍に「土佐の海が世界に通じていると考えると本当に愉快だ」と語ったといわれている(清原2006、p.6)。この時に後の「海援隊」の構想が誕生したのである(永国1988、p.186)。世界地図(=地理教育)が龍馬を含め土佐藩の多くの若者を開眼(世界認識の形成)させたのである。

6. その後の万次郎と日本

1853・54年ペリー艦隊が開国を迫ると、江戸幕府は万次郎を直参にして条約書の翻訳などで重用した。

1860年咸臨丸が太平洋を横断した時にも、艦長の勝海舟(1823～99)は、身分にこだわらず万次郎の語学力と航海技術を評価し同行させた。

福澤諭吉(1834～1901)もこの咸臨丸の一員であり、サンフランシスコの書店で万次郎のアドバイスにしたがって『ウェブスター英語辞典』を購入した。何より英語辞書の価値を知っていた、万次郎のアドバイスがなければ、これは実現しなかったかも知れない(福澤1978、p.118)

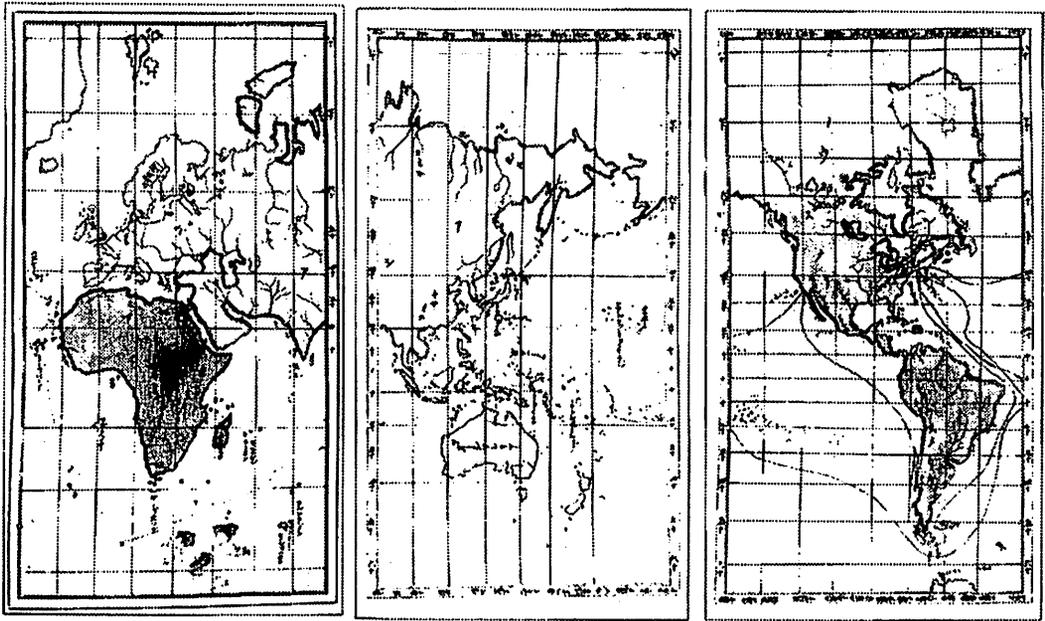


図4：『漂異紀略』(1852)の世界地図
出典：川澄(2001、pp. 525～572)

咸臨丸で帰国した海舟を龍馬が訪ね「弟子入り」したり、諭吉が英語塾(慶應義塾)を開いたのも、その背景には万次郎の影響(存在)があると考えられる。

さらに吉田松陰(1830～58)の、黒船密航計画実施も、帰国者の万次郎が、罰せられずに幕府に重用されたニュースを知ったからであった⁴⁾。

龍馬のいう「日本国の洗濯」=「藩を越えた国家認識」が、薩長同盟につながり倒幕へ向かった。

このように幕末期の世界地図にふれる体験(=地理教育)が「藩益」から「日本国益」へと意識変革(世界認識の形成)を促した結果、わが国は欧米の植民地にならなかった。その後、子どもや女性を対象に著された福澤諭吉(1869)『世界国尽』が、一般大衆に世界地誌を普及した。七五調の心地よいリズムが、識字率の低かった大衆に暗唱されて一大ブームとなり、日本人の世界認識形成に大きく貢献するのである(荒木ほか2006、pp.56～59)。

万次郎の思想は、諭吉により地理教育のテキストの中に受け継がれていくことになる。

7. 結びにかえて

筆者は小稿を、「地理教育の役割」でまとめようと試みた。ここには冒頭で述べたように、昨今の高校における必修科目履修問題の際、「何のためにその教科を学び・内容を教えるのか」という議論がされなかったことへの警鐘の意味が込められている。

小稿では、江戸時代末期にジョン万次郎が持ち帰った世界地図が、当時の日本社会にどんな影響を与えたかをふり返ってみた。「1枚の世界地図」=地理教育が、当時の人々の世界認識の形成に果たした役割について考えたかったからである。

万一、万次郎たちの帰国が、実現していなければ日本の開国や、明治維新はもっと遅れていたかも知れない。そして日本も他のアジア諸国と同様、欧米列強の植民地になっていた可能性が大きい。地理教育の果たしてきた役割もここに存在する。

また、鎖国時代の犯罪者=海外漂流者である万次郎たちが、無事帰国できた背景には、琉球王国の存在があったことを忘れてはいけない。琉球を経由したことが「クッション」となり、厳しい取り調べや刑罰を免れたといえるだろう。同時にこ

の背景には、ペリーの来航という大きな出来事が存在した。そのペリーもまた、事前に琉球王国と交流し、江戸幕府（日本）の情報を収集しているのである。琉球の存在があったからこそ、ペリーの幕府との開国交渉もスムーズに実現できたのである。このような「琉球の役割」については別の機会にあらためて述べたい。

江戸幕末期の地理教育は「藩(藩の利益)→日本国(国家の利益)」へと意識変革を促し日本を欧米列強の植民地から救った。同様に現在の地理教育は「国家の利益→地球の利益」へと私たちの世界認識を変革し、環境問題をはじめとする「地球規模の課題」を解決する可能性を持っている。今後はさらに「地球益」をキーワードとして、日本人の世界認識形成・地理教育との関連を検証したいと考えている。

《追記》

本稿の内容の一部は、人文地理学会2006年度大会(2006年11月11日、於：近畿大学)において一般研究発表(口頭発表)したものである。また、本稿は沖縄県歴史教育者協議会「歴史と実践第27号」(2006年7月26日、pp.51~57、)の内容に、大幅な加筆・修正を加えたものである。

本稿作成にかかわって、日本学術振興会2005年度科学研究費：(基盤研究B、「南海地域における琉球の歴史地理的実体と意味の総合的研究」、課題番号：170320137、研究代表者：高橋誠一)の一部を使用した。

《注》

- 1) エミリーV. ワリナー(1966、pp.162~163)によれば、「たった1つだけ手許に残った世界地図」であり、1846年に英国から出版されたもので、当時の日本では最新の地図であった。河田小龍によって描かれた『漂異紀略』(1852)の世界地図(図4)はこの地図を原典にしている。
- 2) 新井白石は、1708年に屋久島へ布教のため上陸し、とらえられたイタリア人宣教師シドチ(シドッティ)(1668~1714)と出会い、4回

の聞き取り調査を実施して、日本最初の世界地誌書といわれる『采覧異言』(1713)を著している。(辻田1971、p.75)(河村2003、pp.108~129)

- 3) 河田小龍によってまとめられたこの本は、土佐藩主・山内容堂(1827~72)に献上され、現在は高知市立図書館寄託(個人蔵)となっている。これ以外にも「写本」も何冊かが作成されたと推測される。
- 4) 吉田松陰は、1854年ペリーが和親条約締結のため再航した時、黒船への密航を企画して失敗し入獄する。松陰がこの黒船密航を決意した背景には、佐久間象山(1811~64)のアドバイスと、漂流帰国者の万次郎が罰せられず幕府に重用されたことの影響があった(左方1984、pp.75~76)。密航計画の時、松陰は箕作省吾(1844)『新製輿地全図』(世界地図)を持っていた(鮎沢1980、p.284)。

これは松陰の愛読書であった箕作省吾(1845)『坤輿図識』(新製輿地全図の解説書=世界地理書)とともに、後に松下村塾のテキストとなり地理教育に使用された(吉村1989、pp.110~113。川村2003、p.212)。万次郎の世界地図が土佐藩の若者を開眼させたのと同様、松陰の地理教育は長州藩の若者に大きな影響を与えた。

《文献》

- ・鮎沢信太郎(1980)『鎖国時代の世界地理学』原書房
- ・荒木一視ほか(2006)『小学生に教える地理—先生のための最低限ガイド—』ナカニシヤ出版
- ・エミリーV. ワリナー(1966)『新・ジョン万次郎伝』出版共同社
- ・大町桂月(1914)『伯爵後藤藤安二郎』富山房
- ・沖縄大百科事典刊行事務局編(1983)『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社
- ・川澄哲夫編(2001)『中浜万次郎集成・増補改訂版』小学館
- ・河村博忠(2003)『近世日本の世界像—地図でみる変貌する世界—』ペリかん社
- ・清原伸一編(2006)『週間日本の100人、No.002

- 歴史をつくった先人たち・日本の100人：坂本龍馬』(株)デアゴスティーニ・ジャパン
- ・儀間比呂志(2001)『琉球に上陸したジョン万次郎絵物語』沖縄タイムス社
 - ・左方郁子(1984)松陰と象山の出会いー下田密航のころー、奈良本辰也編 (1984)『吉田松陰のすべて』新人物往来社、pp.65~92
 - ・鈴木勤ほか(1996)『ビックマンズスペシャル・歴史クローズアップ・坂本龍馬』世界文化社
 - ・千田稔(2006)『地球儀の社会史ー愛しくも物憂げな球体ー』ナカニシヤ出版、地球発見叢書1
 - ・辻田右左男(1971)『日本近世の地理学』柳原書店
 - ・鶴見俊輔(2001)漂流の思想、川澄哲夫編(2001)『中浜万次郎集成・増補改訂版』小学館pp.41~74
 - ・中濱東一郎(1936)『中濱萬次郎傳』富山房
 - ・中浜博(1991)『私のジョン万次郎ー子孫が明かす漂流150年目の真実ー』小学館
 - ・永国惇哉(1988)中浜万次郎、小西四郎ほか(1988)『坂本龍馬事典』新人物往来社pp.183~187
 - ・長峰操、徳元英隆(2004)『沖縄の伝説散歩』沖縄文化社
 - ・西岡尚也(1999)新学習指導要領にみる地理教育軽視の方向ー高校「地理歴史科」における地理を例としてー、岐阜地理43号pp.152~156
 - ・西岡尚也(2006)小学校高学年における世界地図の教材開発ーすぐに役立つ実践としてー、琉球大学教育学部紀要第68集、pp.97~106
 - ・福沢諭吉(1978)『新訂福翁自伝』岩波書店、原本は福沢諭吉(1903)『福翁自伝(全)』時事新報社
 - ・吉村忠幸(1989)松下村塾の日課とテキスト、山本光編(1989)『吉田松陰と松下村塾の青春』別冊歴史読本1989年3月号、pp.110~113